

〈新聞小説家〉の意見

—石川達三の「自由」談義—

山本幸正

An Opinion of A Best-seller: A controversy about "freedom" caused by Tatsuzo Ishikawa

Yukimasa YAMAMOTO

Tatsuzo Ishikawa caused a controversy about "freedom" in middle part of 1950's. Many intellectuals announced dissenting opinions about "The World Changed" and "An Enemy of Freedom" which were written by Ishikawa. Why did an opinion of a novelist such as Ishikawa become a big problem? Because Ishikawa was a best-seller who was good at a serial story in a newspaper. He had a lot of devoted readers. Even if contents are worthless, it was considered that his remark was important. Through a popular writer named Tatsuzo Ishikawa, I want to argue about a relation of the mass media and literature.

1. 「自由」をめぐる論争

作家の村松梢風や映画監督の木下恵介らを含むアジア連帯文化使節団は、1956年4月24日に出発して以来、インド、エジプト、ギリシャ、ユーゴスラビア、オーストリアなどを視察し、さらにソ連と中国を訪れ、7月2日に無事帰国した⁽¹⁾。その使節団の団長を務めたのが石川達三だった。帰国してから数日後、石川は報告をかねたエッセイを『朝日新聞』と『読売新聞』に5回ずつ連載した。「外遊断片」(『読売新聞』夕刊、7月11日・18日～21日)と「世界は変わった」(『朝日新聞』夕刊、7月11日～15日)である。これらふたつのエッセイで石川は、インドやヨーロッパの国々についてはほとんど触れずに、ソ連と中国で見聞したことだけを書き記した。「外遊断片」は穏便な紀行文風に、「世界は変わった」はポレミックに。その挑発が功を奏したのか、「世界は変わった」を契機に「自由」

をめぐる論争が勃発したのである。

「世界は変わった」で石川は、次のように論を展開していく。戦後の日本には「自由」が氾濫しているけれど、それらは「目的をもたない自由」「野放図な自由」でしかない。これでは「日本が世界の進歩から取り残されてしまう」ことになる。「統制をきらう気持は戦争時代への反動で、致し方ない」が、そろそろ日本の「進歩発展」を考えて「自由」に「統制」を加えるべきではないだろうか。日本では「個人の自由」と「国家の意志」は相容れないものだと思われているが、そもそもその前提がおかしい。事実、ソ連や中国では「国家の意志」という「束縛」があっても、豊かな「自由」が享受されていたのではないか。そう述べて、石川はソ連や中国のユートピックな光景を、次のように描き出す。

社会主義諸国ははっきりした国家の意志をもっている。その事が統制であり自由の束縛で

あるにしても、それらの国々の発展は眼ざましいものであり、社会全体が活気にみちており、楽しげに生活しており、そして人々は道徳的に高められ、生活の安全が保証されているという事実は否定できない。

また石川は批判の矛先を日本の「知識人」や「インテリ」に向ける。「知識人」や「インテリ」は自分の意見を「嘲笑」するだろうが、それは彼らが「共産主義の脅威」というクリシェを鵜呑みにしているからにはほかならない。しかし、これからは日本の「進歩発展」のために、「知識人」も力を尽くさなければならない。みずからの体験をもとに声高に持論を展開する石川は、「世界は変わった」を次のように締めくくる。

大きな整理が必要である。その整理は経済、政治、文化のあらゆる面で、各々研究されなくてはならない。しかしもう一つ以前に、われわれの心を整理しなくてはならない。現状に満足したがる怠惰な知識人が、自分の在り方について考えなくてはならない。文化人知識人の意志が結集され、それが行動的になってくれば、日本の運命は変わるだろう。どんな風にも変えることができる。

このエッセイで石川は、無分別な「自由」に耽溺している日本の現況を批判し、同時に「現状に満足したがる怠惰な知識人」を難詰しようとした。しかし石川の議論は、当時としても取り立てて新鮮味のあるものではなかった。ソ連や中国を生で体験してきた“新帰朝者”特有の傲慢さに満ちた物言いでもある。「世界は変わった」で述べられていることは、戯言として等閑に付してしまえば済んでしまいそうな粗雑な論にすぎない。にもかかわらず、この石川の挑発は多くの「知識人」たちを刺激し、新聞や雑誌を主な舞台に「自由」論争が繰り広げられることになった⁽²⁾。

『毎日新聞』は、はやくも7月26日の「学芸」欄

で「自由」と銘打った特集を掲げて「自由をめぐる議論が盛んである」と報じ、石川達三のインタビューを載せた。翌27日と28日には石川に対する「知識人」からの反論を紹介し、29日には「私への反論に答える」と題して石川が「自由」論を再度寄稿している。『朝日新聞』は8月23日の夕刊で、第3面全体を使って、石川達三と火野葦平の“自由”をめぐる対話を大々的に載せた。『読売新聞』には正宗白鳥・臼井吉見・亀井勝一郎といった文学者たちが反論を寄せ、『週刊読売』は9月9日号で「あなたは自由か不自由か—石川達三氏をめぐる論争から—」という特集を組み、論争の経緯を事細かに解説するとともに石川達三の長大なインタビュー記事掲げ、臼井吉見・亀井勝一郎・大宅壮一・荒正人・宮本顕治の感想を載せた。9月27日と28日に『毎日新聞』が「自由論争 総まとめ」を特集するに及んで、「自由」をめぐる論争はようやく落ち着きをみせるのだが、石川が「世界は変わった」を発表して以来、論壇や文壇は寝ても覚めても「自由」談義に口角泡を飛ばすありさまだった。9月28日の『毎日新聞』「学芸」欄には、その浮かれようが次のように記されていた。

石川達三氏の発言に関連して“自由の問題”は新聞、週刊誌、月刊雑誌などあらゆるジャーナリズムの部面にひろがった。座談会やコラム欄がこのときとばかり活発な“自由談義”をぶつけあい、どの地方の講演会でもかならず“自由”が論じられないと収まらなかった。石川の投げかけた波紋はとても大きなものだったのである。論壇も文壇も、石川が発言するたびに右往左往するかのようだった。10月29日の『読売新聞』夕刊に載った「マス・コミ」欄によれば、石川達三の発言には「妖気」が漂っていたらしい。「なんの新味もないし、もう日本の「進歩的」知識人たちの標語」になっているような凡庸な見解であっても、「石川が一発すると一まつの妖気がたゞ

よう」くらいだった。そうした「妖気」が効力を発揮したのか、石川の言動はその粗雑な中身とは関係なく、「あらゆるジャーナリズムの部面」で「自由」談義を活性化させたのである。

2. 「自由の敵」論争

「自由」をめぐる論争は一応終息した。しかし石川達三の「妖気」が消えることはなかった。翌年の1月22日に石川が『東京新聞』に発表した「自由の敵」という短文は、またもや文壇や新聞読者のあいだに喧々囂々たる論争を引き起こしたのである。

『東京新聞』の「石筆」欄という小さな囲み記事に載った「自由の敵」で石川は、谷崎潤一郎の『鍵』（中央公論社、1956年12月）や川崎長太郎の「硬太りの女」（『群像』、1957年1月）をとりあげて、「こんな物まで芸術扱いすることは芸術への冒とくである」と言い放った。谷崎の『鍵』は、56歳になる大学教授と45歳の妻の「性生活」を日記形式で露骨に書いた作品として、連載中（『中央公論』、1956年1月、5月～12月）から「猥褻」なのか「芸術」なのか話題になっていた。折しも売春防止法案を審議中だった衆院法務委員会でも問題作として取り上げられたくらいで、一連の論争は『鍵』論争として知られている⁽³⁾。「硬太りの女」はみずから「私小説家」を自認していた川崎長太郎らしい作品で、作者自身と覚しき初老の人物と、夫と別れてひとりで生活している40歳の女性との性関係が描かれていた。

石川が標的にしたこれらの作品の具体的な分析は、別の機会に譲ることにしたい。いま確認しておきたいのは、谷崎と川崎の作品を読んで我慢ならなかった石川のことだ。分別がつかはずの然るべき年齢に達しても、いまだ性的な欲望に溺れてしまう人物たちを物語った『鍵』や「硬太りの女」は、石川にとっては「芸術への冒とく」でしかなく、

何よりも「自由の敵」だったのである。

これらの作家は言論表現の自由を行使しているつもりかもしれないが、こんな不潔な非芸術が横行して行くとすれば、官憲が検閲法を作りたくなるのは当然だし、また必要にもなって来る。つまりこういう小説は言論表現の自由を守る上に大きな障害となる。つまりは自由の敵ということになりはしないか。

先に瞥見した石川の「自由」談義と同じ論理が、ここでも顔を覗かせている。「野放図」な「言論の自由」が幅を利かせすぎた結果、『鍵』や「硬太りの女」みたいな「不潔な非芸術」がまかりとおることになった。このままではいずれ戦時中のような「検閲法」が復活することになるだろう。そうなったら大変だ。だから「言論の自由」を謳歌するのではなく、今のうちに自分たちで「自由」を「統制」しなければならない。前年と同じように石川は、戦後に手にした自堕落な「自由」をそのまま享受し続けるのではなく、日本の「進歩発展」を憂えて、「大きな整理が必要である」と述べたかったのである。

くりかえすが、「自由の敵」はほんの小さな囲み記事に掲載された短文にすぎない。しかも一方的に『鍵』や「硬太りの女」を否定する論旨は、やはり粗雑なものだ。くわえて石川自身、前年に「不潔な非芸術」といわれかねない作品をベストセラーにしていた。48歳の初老の男が19歳のユカちゃんに抱く性的な欲望をあからさまに物語った『四十八歳の抵抗』（『読売新聞』、1955年11月16日～56年4月13日）は、単行本化（新潮社、1956年6月）されるやいなや、大ベストセラーになった⁽⁴⁾。この作品は、ヌード撮影会にむらがる男たちを写すなど、戦後風俗の証言としてなら忘れることのできないものだ。しかし『四十八歳の抵抗』に収められた興味深いエピソードの数々は、1957年の石川だったら「自由の敵」と憤慨するにちが

いないものでもある。石川達三は、1年前に『四十八歳の抵抗』というベストセラーがあったことなど失念したかのように、「自由の敵」を書いている。だからその短文はひとりよがりな戯言にしかない。いや、戯言として無視してしまえば充分な代物だ。にもかかわらず、「妖気」のせいなのか、「自由の敵」はセンセーショナルな論争を巻き起こしたのである⁽⁵⁾。

「自由の敵」を掲載した『東京新聞』には読者からのたくさんの投書が次々と舞い込んだらしい。1月26日の『東京新聞』は第1面を使って、石川の写真とともに「石川達三氏の投じた「自由の敵」論をめぐって」と題した記事を大きく掲げ、「賛否両方の投書の一部を紹介して読者の批判に供したい」と読者に呼びかけた。その後『東京新聞』には白井吉見と平野謙が反論を寄稿し、石川自身は「文芸と自由の問題」で再度持論を展開した。「自由の敵」が発表された後に刊行された文芸雑誌3月号は、『出版ニュース』3月上旬号が総括しているように、「いっせいに、これをとりあげた」のだった。とりわけ『新潮』3月号は「「自由の敵」についての作家、評論家の意見をアンケートによって特集」し、28名の文学者の感想を並べた。アンケートに答えた28名のうち、石川の見解に賛成したのは4名、『鍵』の評価では反対であるが「硬太りの女」については賛成というのが9名、全面的に反対したのが15名という結果だった⁽⁶⁾。このアンケートの結果などもふまえて、2月14日の『東京新聞』は再び第1面を使って「波紋を呼ぶ“自由”論争」を特集し、「自由の敵」が「文壇内外に大きなセンセーションをまき起した」ことを伝えた。「自由の敵」という小さな囲み記事は、大変な騒ぎをもたらした。4ヶ月ほど前に石川達三には「妖気」があると指摘した『読売新聞』夕刊の「マス・コミ」欄は、今度は「石川達三は文壇の放火犯人といった格好である」（3月15日）と述べてい

る。「放火犯人」をほっておくことは、だれにもできなかった。だれもが石川達三に眼を向けざるを得なかったのである。

3. 問題としての石川達三

「自由」をめぐる論争においても、「自由の敵」をめぐる論争においても、石川が提示した論は、人目を引くものではあった。しかし論旨はあまりに粗雑なものだったし、議論も感情的な方向に傾くことが多かった。特に「自由の敵」などはちっちゃなスペースにちんまり載った短文なのだから、無視してしまっても事足りるはずだし、まじめに正面切って相手をするような代物ではなかった。念のために述べておくと、石川を軽視するこうした見解は、現在から過去を一方的に裁断するわたしの独断と偏見によるものではない。なぜならすでに同時代から、石川に反論しようとする多くの知識人たちが、石川の見解には真剣に相手にするような「手応え」もないのだけれど仕方なく反論するのだと、きまり悪そうに呟き続けていたからである。

たとえば白井吉見は「世界は変わった」を批判した「進歩と自由を弄ぶ知識人」（『文藝春秋』、1956年10月）の冒頭に、次のような持ってまわった断り書きを記している。

あれは、嘸みつくほど、手応えのあるものではなく、むしろ、その逆といつて、ものだ。嘸みつこうにも、嘸みつきようのないところが、石川氏のあの感想の特質というべきものであろう。そのくせ、あれは、日本のある種の知識人の、ものの考えかたの、極度に誇張化された一見本と考えられるところがあり、そこに、ほくとしては、すくなくからぬ興味を感じている。

中村光夫も同じだった。中村は「自由の敵」への

反論を書くときに、「かういふ俗見には—それが俗見であるだけに—案外賛成者が多いのではないかと思はれるので、まづ氏の文章を少し分析して見ませう」と述べた。「俗見」ではあるけれど仕方なく「分析」するのだと自分自身に言い聞かせるかのように。さらに末尾でも「天成の通俗作家が、かういふ大切な問題で、いゝ加減な思ひつきを云ふのは慎んでもらひたい」と、石川達三が相手にするまでもない「通俗作家」であることをあらためて確認していた（「表現の自由」、『文芸』、1957年3月）。

多くの人びとにとって石川達三に反論することは、羞恥心をとまなうふるまいだったのだ。留保をつけなければ反論したくもない、とるにたりない相手にすぎなかった。にもかかわらず、知識人やインテリの大多数は石川を無視しきれなかった。留保をつけ、きまり悪そうにしながらも、石川への反論を口にせずにはいられなかった。これはどうしてなのか。

なるほど石原萌記が指摘しているように、世界情勢も無視できない一因だ⁽⁷⁾。1956年2月にフルシチョフがスターリン批判の演説を行い、4月17日にはコミンフォルムの解散が発表され、そして10月19日には「日ソ共同宣言」が調印される。こうした共産圏での変化も、石川の「世界は変わった」が注目されることになった要因のひとつに数えられるだろう。あるいは敗戦を契機にもたらされた「言論の自由」が話題になっていたことも一因になったはずだ。「自由の敵」が発表されたのは、いわゆる「チャタレイ裁判」の最高裁判決（1957年3月13日）が迫っていた時期だった。しかも先にも述べたように谷崎潤一郎の『鍵』が国会で問題視されるなど、「言論の自由」の弊害が議論され続けていた。こうした状況に鑑み、日本文芸家協会も1956年1月に「言論表現問題委員会」を結成し、「文芸家の活動の自由を確保するため、検閲やそれ

に類似する統制を絶対にふせごう」⁽⁸⁾とした。その委員会の中心人物のひとりが、石川達三だった。だから「言論の自由」に制限を設けるべきではないかと石川が提案したことは、それなりに注目を集めてもおかしくはなかった。

そもそも石川達三が、戦時下に言論弾圧の犠牲になった作家として知られていたことも忘れてはなるまい。石川の「生きてゐる兵隊」を掲載するはずだった『中央公論』1938年3月号は発売頒布禁止に処せられ、石川は実刑判決を受けた。したがって、かつての言論弾圧の犠牲者が率先して「言論の自由」に疑義を呈したのだから、衆目を集めたとしても何らの不思議もないはずだ。

しかし、どの説明にも今ひとつ釈然としないものが残る。「言論表現問題委員会」の中心人物による裏切り行為として、石川の言動を断罪する批判はほとんど見当らないし、かつて言論弾圧で犠牲になった作家の「転向」を問題にした論も、まったくといっていいほどなかった。世界情勢は確かに重要だろう。しかし石川が「世界は変わった」を発表したのとほぼ同時期に、桑原武夫も中谷宇吉郎との対談で「しめくくりがないことが自由だ」と考えている日本の「自由」観を批判して、「ソヴェトなんか、大変なしめくくりがある」と称揚していた（「自由過剰の国・日本」、『文藝春秋』、1956年8月）。この桑原の発言は石川の「世界は変わった」とともに当初は論議の対象になったのだが、いつのまにか立ち消え、石川の言葉ばかりが取り沙汰されるようになっていった。桑原武夫は問題にならず、石川達三は問題にされる。やはり「妖気」のためなのか。

なぜ石川達三は問題として屹立するのか。その石川のポジショニングに着目したのが、伊藤整の「傍観者の権威」（『中央公論』、1956年10月）だった。伊藤は「共産主義国家における人間の自由についての、最近の石川達三の言辞ほど共産主義社

会の幸福を信じさせたものはない。このやうな大きな効果を生んだものは、戦後現はれなかった」と述べ、なぜ「世界は変わった」が「あれほどの効果」をもたらしたのか、分析していく。結論は実に単純なものだった。伊藤によれば、石川の論に説得力があったのは、彼が「党员でも同調者でもない」ためだった。共産党とは一線を画した「石川達三なる人間の自由さに対する信頼感」によって、人びとは「世界は変わった」に説得力を感じたのだ。伊藤は「傍観者」「中立者」という石川のポジショニングを重視した。この伊藤の指摘は示唆的だ。

石川は共産党の党员でも同調者でもなかった。さらに日本文芸家協会の中心的なメンバーでありながら、文壇の中では異色の文学者だった⁽⁹⁾。通俗的とみなされかねない新聞小説の名手であり、次々にベストセラーを生み出す流行作家だった。とはいえ、普通の流行作家とも毛色の違う存在でもあった。大宅壮一が「石川達三は、今日の文壇で一種の流行作家になっている。“一種の”というのは、他の流行作家とはちょっとちがっているからだ」⁽¹⁰⁾と述べている通りだ。何が「ちがって」いたのか。再び伊藤整によるならば、「石川達三は新聞小説家として確実な愛読者を持つてゐる数少い作家」ではあるが、同時に「真面目な問題を作品を通して与へてゐる」点において、異色の〈新聞小説家〉だった。「人生をどう考へるべきか、といふキマジメな論理的な態度が常に彼についてまはつてゐる」ゆえに、石川達三は平凡な「通俗作家」とは異なっていたのである⁽¹¹⁾。

共産党と無関係であるだけではない。石川達三は文壇とも距離を置く作家であり、かといって大衆に媚びを売ることにあくせくする「通俗作家」でもなかった。「真面目な問題」を提供する異色の〈新聞小説家〉、それが石川だった⁽¹²⁾。新聞小説は、「百万人の文学」といわれていたように、膨大な数

の読者を相手にしなくてはならないマスメディアの文学である。たいていの小説家は新聞小説を書くときに、マスとして存在する読者にひるんでしまい、日和ってしまう。が、石川はちがった。読者に真っ向から挑もうとする異端の〈新聞小説家〉だったのだ。後に石川自身が「小説を書くことは読者との闘いであると思う。読者との綱曳きである」⁽¹³⁾と述べている。そうした硬派な姿勢によって、石川達三は〈新聞小説家〉として多大な読者から確固とした支持を得ていた。だからであろう、「自由の敵」論争を総括した『東京新聞』(1957年2月14日)には次のように記されていた。

投書からみて一般読者は石川説に賛成が多いのは、知識人と一般民衆との評価の距離を示すものでもあろう。

いうならば、石川達三という〈新聞小説家〉の背後には“百万人”の読者が控えていたのである。したがって石川を無視することは“百万人”の読者を切り捨てることになってしまう。それではいっただれが〈新聞小説家〉の意見を無視することができよう。マスコミュニケーションが急成長していく時代にあつて、新聞という代表的なマスメディアを舞台に、石川の言動は際立っていたのだ。それは内容の如何に関わらず、問題にされるにふさわしいものだったのである。

荒正人によれば、1955年前後、社会の中における小説家の位置づけは、従来とは一変したものになっていた。1957年6月に「KAPPA BOOKS」の一冊として刊行された『小説家 現代の英雄』(光文社)で荒は、「小説家は、反逆者から英雄に変わってしまった。マス・コミュニケーションの王者でもある」と述べていた。1951年に民間のラジオ放送局が開局し、テレビではNHKが1953年2月に、日本テレビが同年8月に開局した。1956年2月には『週刊新潮』が創刊され、いわゆる「週刊誌時代」が到来した。1955年前後、時代はま

ちがいなく「マスメディアの重層化時代」⁽¹⁴⁾へと変容しつつあった。そうした時代にあって荒のいうように、小説家が「マス・コミュニケーションの王者」となり「現代の英雄」となったのならば、〈新聞小説家〉は「王者」の中の「王者」であり、「英雄」の中の「英雄」だったはずだ。「自由」をめぐる論争や「自由の敵」論争では、論者という論者が、中身はとるにたりないのだけれど、相手にしないわけにはいかないからといった顔つきで、石川達三への反論をきまり悪げに呟いた。知識人やインテリといえども、マスメディアの時代に言論で生きていこうとするからには、〈新聞小説家〉の意見にそっぽを向いたままでいることは許されなかった。石川達三という〈新聞小説家〉は、まさしくマスメディアの中で“偶像”として君臨していたのである。

4. マジョリティの文学

後にみずから述べていたように、石川達三は「書くことの社会的な意義ははっきりしなくては、作品に着手できない」⁽¹⁵⁾小説家だった。石川にとって重要だったのは、作品の「芸術的価値」などではなく、その「目的」だった。「自由」についても石川の姿勢は一貫していた。「自由」をめぐる論争や「自由の敵」論争の後も石川は「自由」について発言し続けたが、「目的」のためには「自由」を「統制」すべきだという石川の持論は変わらない⁽¹⁶⁾。「言論表現の自由は人民にとって何よりも大切なものだ」けれど、「何よりも大切なものは濫用してはならない」ことを強調し続けた。「猥褻な表現を弄び、それをさえも自由の範囲だと主張する」輩を叱り飛ばし、「国家社会には一定の秩序があり、秩序を拒否するわけには行かない」と教え諭すことを忘れなかった。日本の「進歩発展」という「目的」のためには「自由」を「統制」しなければ

ならないと主張し続け、その「目的」のために作品を書き続けた。容易に予想されるように、石川の口当たりのよいモラルは多くの読者を獲得し、石川はベストセラーを生み出す〈新聞小説家〉という“偶像”であり続けた。

“百万人”の読者に向けて「真面目な問題」をためらいもなく投げ出してしまふ石川は、たしかに異色の〈新聞小説家〉だった。しかし石川は、文壇や論壇の力学からは“異端”だったかもしれないが、決してマイナーな存在ではなかった。「世界は変った」を批判した福田恆存が「疑似インテリ批判」(『新潮』, 1956年10月)で喝破していたように、石川の「自由」論議の要諦は、「[多数者の進歩]あるひは[社会全体の進歩]のためには[少数者の自由]あるひは[個人の自由]を犠牲にしなければならない」というところにあった。福田の人口に膾炙したエッセイ「一匹と九十九匹と」(『思索』, 1947年3月)の響みに倣っているならば、石川の文学はあくまでも「百匹」を救うことを「目的」にしながら、いつのまにか「一匹」を排除してしまうものだったのである。「百匹の救はれることを信じる心において、かれはまた底ぬけのオプティミストでもあろう。そのかれのオプティミズムが九十九匹に専念する政治の道は是認するのにはほかならない」。石川は、まさに福田がいうところの「政治の道は是認する」方に向かって歩み続けた。

「一匹と九十九匹と」で福田恆存は、「ぼくたちは見うしなはれたる一匹のゆくへをたづねて歩かねばならぬであろう」とも述べていた。私たちもまた、〈新聞小説家〉が顧みることすらしなかった「一匹のゆくへ」をたづねることで、この論を締めくくりにしよう。

たとえば丸山真男は、松田道雄の『療養の設計』(岩波新書, 1955年7月)を書評した短い文章の中に、「一匹」のかぼそい声を次のように書き残して

いた。

さらに一般社会人の結核に対する常識は近ごろ集団検診やB・C・Gの普及によって向上したとはいいながら、他面昔ながらの結核観も執拗に残存しています。(例をあげて悪いのですが、最近某大新聞に連載された石川達三氏の『自分の穴の中で』という小説には結核の病氣と病人が思いきりきたならしく醜悪に描かれていました。あれを読んで石川氏が社会党左派の支持者で、行動的にも進歩的立場をとっている作家とはどうしても思えない、と泣いて憤慨した患者を一人ならず知っています。) 無知はいつの場合でも極度の無関心と極度の恐怖の双生児を生みます。(『図書』1955年8月号、傍点は引用者による)

『自分の穴の中で』は『朝日新聞』に連載(1954年11月4日～55年6月7日)された評判の新聞小説だった。『読売新聞』の「今年の新聞小説展望」(1956年12月22日)によれば、「今年の新聞小説の収穫は、世評の一致するところ、なんとといっても、石川達三「自分の穴の中で」だったろう」といわれるくらいに評価され、石川の代表的な新聞小説のひとつになった。しかしそれはあくまでも「九十九匹」にとってだった。みずからも結核に苦しみ、肺を摘出せざるを得なかった丸山は、療養所で「一匹」の泣き声に耳を傾けた。しかしその声が「新聞小説家」の耳に届くことはなかった。「新聞小説家」は「九十九匹」を満足させることに邁進していたからだ。

あるいは、いまだに「日本教職員組合」の傘下にある先生方の斗いの記録⁽¹⁷⁾として高く評価され続けている『人間の壁』(『朝日新聞』, 1957年8月23日～1959年4月12日)を取り上げてよい。石川自身にとっても自信作だったらしく、「はっきりと自分の旗じるしを決定することになった」(「人間の壁」を終って, 『朝日新聞』, 1959年4

月14日)と述べているくらいだ。その末尾を見てもよい。「健康」に溢れた体育の授業風景に「希望」を託すことで、長大な『人間の壁』の物語は閉じられる。

尾崎先生は頸からひもで下げた笛を吹く。笛の音は澄んで、高い空にまで昇って行く。校庭のまんなかに茂った葉桜の下で、男の子は一人ずつ跳び箱に向かって走る。真剣な顔。弾力のある四肢。女の子は両手をひらいて、平均台の上をわたる。緊張した足の筋肉。ひきしまった唇。……ちんばの内村義一には跳び箱はできない。しかし簡単な器械体操ならやれる。跳び箱を跳び終った男生徒にまじって、彼は低い鉄棒にぶらさがる。尾崎ふみ子は、沢田先生の辞職の原因になったこのちんばの少年を、沢田先生から預けられたような気持で見まもった。

まぶしい程の強い日光をあびながら、健康な子供たちのからだは、健康なよろこびに踊っている。尾崎先生は新しい決意をこめて、新しい願いをこめて、彼等のまえに立っているのだった。彼女はこの生徒たちのたくましい体に望みをかけ、正しい心に期待をかけていた。やがてこの子供たちが健康な青年となって、新しい日本の社会を築いて行く。(傍点は引用者による)

「新しい日本の社会を築いて行く」という「望み」をかけられているのは、「たくましい体」を持った、やがて「健康な青年」となるはずの子どもたちだ。では跳び箱を跳ぶことすらできない「ちんばの内村義一」はどうなるのか。彼は「新しい日本の社会」のお荷物でしかないではないか。石川は「人間の壁」を終ってで、『人間の壁』は「私の公約」であると断言していた。石川の「公約」、それは「一匹」の「ちんば」を黙殺して、「九十九匹」による「健康」な「新しい日本の社会」を築きあげ

ることだったのだろうか。『人間の壁』が「理想」としたのは、「健康」なマジョリティによって不「健康」が駆逐された「社会」だったのである。

異色の〈新聞小説家〉だった石川達三は、マジョリティのための文学を量産し続けた。その作品をナイーブに評価する声も、いまだに聞こえてくる。「妖気」は石川の死後も残存しているというべきか。「九十九匹」のための文学がどれほど暴力的に「一匹」を抹殺したのか。それを見ていくことはマスメディアと文学の関わりを考える上でも必要だ。〈新聞小説家〉としての石川達三を、もう一度問題として捉えなおさなければならない。本論は、その試みのためのささやかな一歩である。

【注】

- (1) 石川達三が団長を務めたアジア連帯文化使節団の団員は次の通りだった。谷川徹三、杉村春子、八田元夫、村松梢風、尾崎宏次、花柳徳兵衛、松岡洋子、芥川也寸志、福田豊四郎、城戸幡太郎、淡徳三郎、菊池一雄、本郷新、加藤唐九郎、渡辺義雄、木下恵介。
- (2) 石川達三の「世界は変わった」に触発されて発表された主な論文や対談などには、次のようなものがあった。
 - ・加藤周一「今月の論調」、『毎日新聞』「学芸」欄、7月18日。
 - ・「石川達三に一言」、『毎日新聞』「憂楽帳」欄、7月19日。
 - ・石川達三、白井吉見「日本知識人と革命」、『中央公論』8月号。
 - ・「自由①～④」、『毎日新聞』、7月26日～29日。
 - ・亀井勝一郎「革命と自由」、『読売新聞』夕刊、7月30日。
 - ・池田潔「石川達三氏の『世界は変わった』を読んで」、『朝日新聞』、7月31日。
 - ・河盛好蔵「自由と進歩」、『毎日新聞』、8月1日。
 - ・関嘉彦「『個人の自由』を再検討」、『読売新聞』、8月3日。
 - ・「中間小説評 バカバカしい石川、白井論争」、『読売新聞』夕刊、8月3日。
 - ・阿部真之助「再び牢獄に追込むな」、『毎日新聞』、8月4日。
 - ・「“思想のいろは”から」、『読売新聞』夕刊「マス・コミ」欄、8月6日。
 - ・白井吉見「随想 石川達三論」、『読売新聞』夕刊、8月9日。
 - ・正宗白鳥「私も世界の真相を知りたい」、『読売新聞』夕刊、8月20日、21日。
 - ・「パブリック・リレーションズ」、『読売新聞』夕刊「マス・コミ」欄、8月20日。
 - ・石川達三、火野葦平「“自由”をめぐる対話」、『朝日新聞』夕刊、8月23日。
 - ・中村哲「論壇時評 作家の文明評論」、『読売新聞』夕刊、8月23日。
 - ・向坂逸郎「社会主義と自由」、『朝日新聞』、8月24日。
 - ・牧野光雄「『自由をめぐる対話』について」、『朝日新聞』「声」欄、8月27日。
 - ・三好十郎「思想への貞潔」、『読売新聞』夕刊、9月4日。
 - ・城戸又一「共産圏の“自由”」、『朝日新聞』、9月8日。
 - ・特集「あなたは自由か不自由か 石川達三氏をめぐる論争から」、『週刊読売』9月9日号。
 - ・亀井勝一郎「知識人の交代」、『毎日新聞』9月9日。
 - ・伊藤整「傍観者の権威」、『中央公論』10月号。
 - ・白井吉見「進歩と自由を弄ぶ知識人」、『文藝春秋』10月号。
 - ・福田恆存「疑似インテリ批判」、『新潮』10月号。
 - ・南博、日高六郎、山下肇、野間宏「座談会 知識人というもの」、『世界』10月号。
 - ・福田恆存「自由と唯物思想」、『毎日新聞』、9月11日、12日。
 - ・亀井勝一郎「知識人の自主性」、『読売新聞』夕刊、9月14日。
 - ・「自由論争 総まくり」、『毎日新聞』、9月27日、28日。
 - ・平林たい子、寺田透、中屋健一「座談会 時流裁断」、『群像』11月号。
- (3) 『鍵』にまつわる論争については、たとえば田辺俊建「谷崎潤一郎『鍵』論争覚書」(『安田学園研究紀要』1983年2月)などがわかり。
- (4) 『四十八歳の抵抗』がもたらした反響の大きさについては、たとえば多田道太郎「四十八歳の抵抗」(朝日選書107『ベストセラー物語(中)』朝日新聞社、1978年4月)がわかり。
- (5) 石川達三の「自由の敵」に触発されて発表された主な論文や対談などには、次のようなものがあった。
 - ・「功利的尺度を排す」、『東京新聞』夕刊「大波小波」

- 欄, 1月25日。
- ・「石川達三氏の投じた「自由の敵」論をめぐって」, 『東京新聞』, 1月26日。
 - ・白井吉見「芸術の貧困と言論の自由」, 『東京新聞』夕刊, 1月29日, 30日。
 - ・「編集手帳」, 『読売新聞』, 1月30日。
 - ・石川達三「文芸と自由の問題」, 『東京新聞』夕刊, 1月31日, 2月1日。
 - ・平野謙「芸術家の苦痛と自由感」, 『東京新聞』夕刊, 2月9日, 10日。
 - ・「「自由の敵」について (アンケート)」, 『新潮』3月号。
 - ・福田恆存「『鍵』と石川達三」, 『新潮』3月号。
 - ・伊藤整「石川達三の説に対する感想」, 『群像』3月号。
 - ・中村光夫「表現の自由」, 『文芸』3月号。
 - ・伊藤整「文学は良識を怖れない」, 『文学界』3月号。
 - ・齋藤兵衛「日本の現実と小説の貧困」, 『文学界』3月号。
 - ・石川達三「作家と自由」, 『東京新聞』, 2月14日, 15日。
 - ・吉行淳之介「小説における「私」」, 『毎日新聞』, 2月17日。
 - ・青野季吉「作家の自由」, 『朝日新聞』, 2月22日。
 - ・浅見淵「一種不敵な作家魂」, 『日本読書新聞』, 2月25日。
 - ・「共通の話題「自由の敵」」, 『出版ニュース』3月上旬号。
 - ・齋藤兵衛「何が自由の敵か」, 『文学界』4月号。
 - ・「文学者は最高の検閲者」, 『読売新聞』夕刊「マス・コミ」欄, 3月15日。
 - ・「よみうり寸評」, 『読売新聞』夕刊, 3月17日。
 - ・新島繁「性と文学と政治」, 『出版ニュース』3月下旬号。
 - ・中島健蔵, 佐藤春夫, 舟橋聖一, 石川達三「座談会 芸術と大衆」, 『群像』5月号。
 - ・川崎長太郎「わが「生活と文学」」, 『群像』6月号。
- (6) アンケートの結果をくわしく記しておく。石川説に賛成したのは、青野季吉, 石坂洋次郎, 木下順二, 永井龍男。『鍵』については反対だが「硬太りの女」の評価には賛成というのが、石原慎太郎, 白井吉見, 坪田譲治, 丹羽文雄, 平野謙, 平林たい子, 福原麟太郎, 本多顕彰, 正宗白鳥。全面的に反対したのが、池田潔, 大岡昇平, 河上徹太郎, 川崎長太郎, 河盛好蔵, 塩尻公明, 獅子文六, 高橋義孝, 高見順, 武田泰淳, 野間宏, 三島由紀夫, 室生犀星, 山本健吉, 吉田健一だった。
- (7) 石原萌記「石川達三「世界は変わった」の自由論争」(『戦後日本知識人の発言の軌跡』所収, 自由社, 1999年6月)
- (8) 「言論表現問題委員会」の結成を伝える『朝日新聞』1956年1月14日の記事「“言論の自由”確保へ」からの引用。
- (9) 『読売新聞』の文化部記者だった竹内良夫は『文壇のセンセイたち』(学風書院, 1957年4月)で、石川達三をいわゆる純文学作家とは異なる「数少ない日本のベストセラーズ作家」として扱っている。
- (10) 『現代の魅惑』(現代社, 1957年3月)。
- (11) 伊藤整「具体的人間一石川達三論」(『文学界』, 1953年2月)。
- (12) 石川が「新聞小説家」になるまでのプロセスについては、「マスメディアの中の小説家 — 新聞小説家」としての石川達三(『国文学研究』, 2007年6月)で論じた。
- (13) 『経験的小説論』(文藝春秋, 1970年5月)。
- (14) 日本ジャーナリスト会議・出版支部編『目で見える 出版ジャーナリズム小史』(高文研, 1985年12月)。
- (15) 『経験的小説論』, (13)を参照。
- (16) 新潮文庫版『生きている自由』(1981年4月)の「解説」で久保田正文は、「自由の問題は著者にとって作家活動に入った初期からの、ほとんど生涯のテーマと言いうるものであり、とくに戦後になってからはそのエッセイにおいてのみならず、小説においてもその問題にふれることが多くなっていった」と述べている。付言しておくなら、石川の「自由」観は、戦時下から戦後にかけてほぼ一貫していた。「生きてゐる兵隊」で言論弾圧の犠牲者になったにもかかわらず、石川はすでに戦時下に発表した「実践の場合」(『文藝』1943年12月)で、「私は、小説といふものがすべて国家の宣伝機関となり政府のお先棒をかつぐことになつても構はないと思ふ」と書いていた。だから石川にとっては、国家の「統制」はあって然るべきものだったのだ。「生きてゐる兵隊」の筆禍事件や、戦時下の言論弾圧を象徴する横浜事件を扱った『風にそよぐ葦』(『毎日新聞』, 1949年4月15日~11月15日, 1950年7月11日~51年3月10日)などの効用で、ややもすると石川を、言論の自由を擁護する守護聖人とみなす傾向がある。しかし石川が国家や日本に抗って「警戒せよ! 諸君の自由はもういくらも残っていないのだ」(「もう自由はないのか」, 『読売新聞』, 1952年3月10日)などと氣勢を上げたのは、実のところ『風』に

〈新聞小説家〉の意見

そよぐ葦』を連載していた時期の前後くらいだけだった。その一時期を除いて、石川は終生一貫して、日本の「進歩発展」という「目的」に奉仕する「統制」の

ある「自由」を主張し続けたのである。

(17) 香内信子「石川達三『人間の壁』論」(『国文学 解釈と鑑賞』, 2005年4月)。